

左京一条二坊十五坪の調査

—第511次

1 はじめに

奈良市法華寺町内での個人住宅建設に先立つ発掘調査である。調査地は法華寺旧境内に北面する左京一条二坊十五坪の南辺にやや近い東西中央付近に位置する（図Ⅲ-41）。調査面積は東西5m、南北5mの25㎡である。調査期間は2013年4月2日から4月8日までである。

2 基本層序

現地表土は宅地造成にともなう真砂が敷きつめられている。その下に、現代の廃棄物を多量に含む黒色土が30～80cmほど堆積する。調査区内の西部ではその黒色土の直下が奈良時代の整地層であり遺構検出面である。

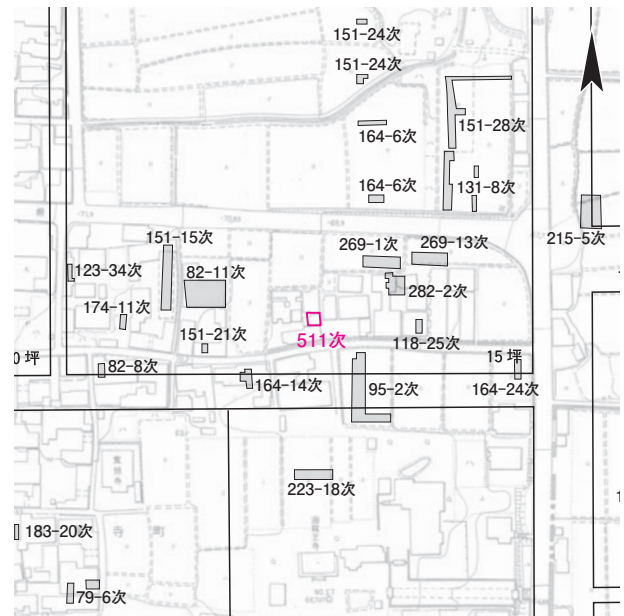
調査区東部では部分的に耕作土の床土が20～40cmほど堆積しており、その下が遺構検出面である。遺構検出面の標高は調査区西端で約68.4m、調査区東端で約68.2mである。

なお、調査区西南角の攪乱坑を利用した断割調査により、標高約67.6mで古墳時代以前とみられる旧表土層を検出している。調査区東端では標高約67.8mで地山面を検出している。そのため、奈良時代の整地層は80cmほどの厚さにおよんでいたことがわかる。

3 検出遺構

坪内道路SF10375・東側溝SD10376 調査区の西半で検出した、十五坪を東西に二分する南北道路とその東側溝である（図Ⅲ-42）。坪内道路SF10375は調査区内の範囲で東西幅3.4mを検出したが、西側溝は調査範囲外のため本来の路面幅は不明である。厚さ50cmほどの精良な粘質土をもちいた整地土（整地土下層）の上に、砂礫をやや多く含む整地土（整地土上層）が厚さ約20cmほどみられる。この整地土上層の土は坪内道路SF10375上でしかみられず、また砂礫をやや多く含むことから、舗装用の土であったとみられる。

東側溝SD10376は、整地土上層からの深さ約60cmで、東西幅は約80cmである。東肩の一部には径20～30cmの礫が積み重なるように遺存しており、護岸としてもちいら



図Ⅲ-41 第511次調査区位置図 1：3000

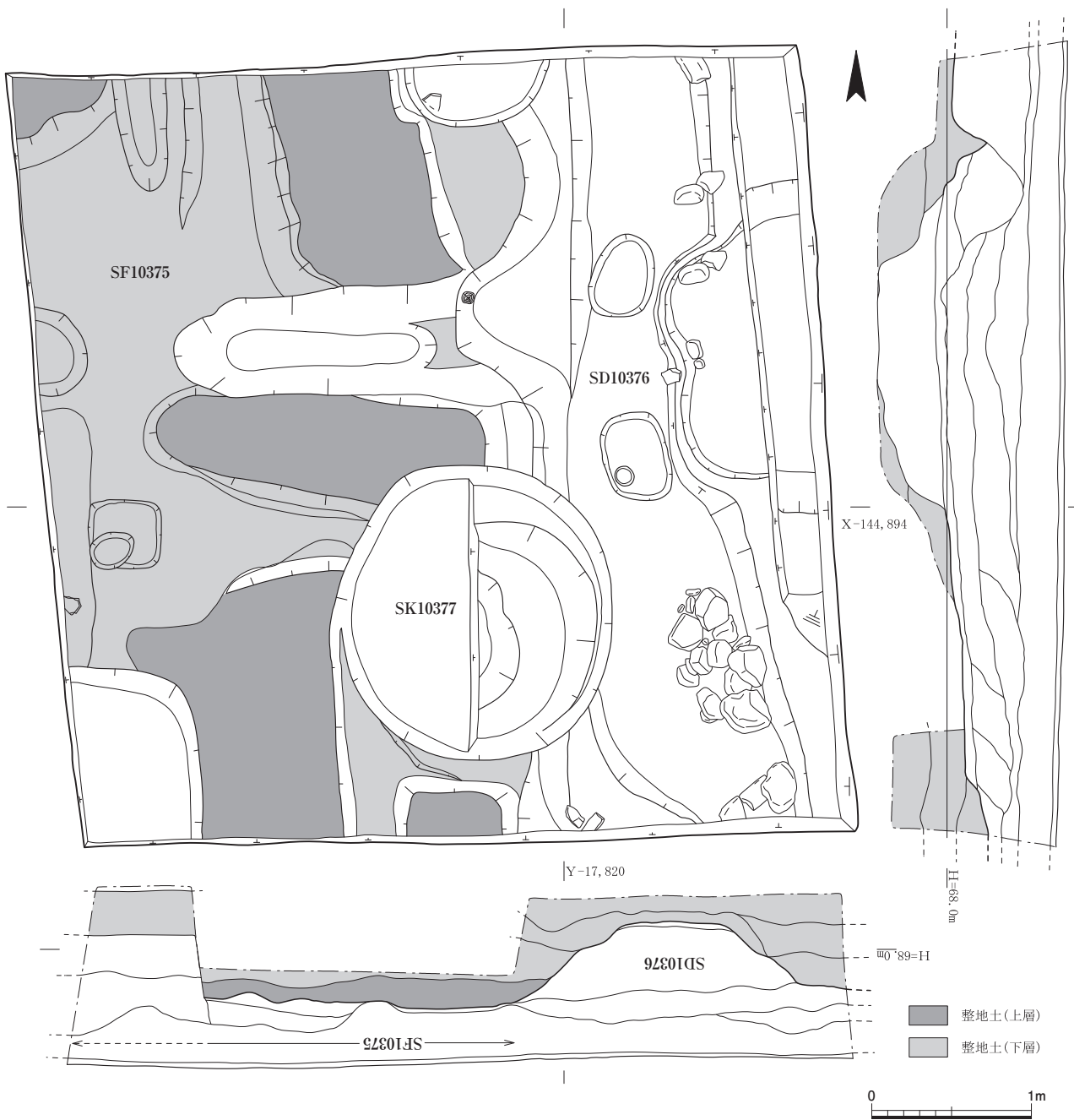
れていたものとみられる。埋土は上下2層にわかれ、下層の埋土は水性の堆積で、溝が機能していた段階の堆積とみられる。下層埋土は厚さ5cmほどとそれほど厚くないため、溝はきちんと手入れがなされていたのであろう。上層埋土は一連で堆積しており、溝の廃絶時に埋め立てられたものとみられる。なお、上層埋土からは黒色土器が出土しているが、溝の廃絶年代は平城京廃絶後それほど下らない範囲におさまるとみられる。

土坑SK10377 調査区中央で検出した東西1.7m、南北1.8mの円形の土坑。東側溝SD10376の埋土上層から掘削されている。埋土から14世紀代の土器が出土した。なお、ほかにも調査区の北端や東端でも同様の埋土をもった土坑を検出している。

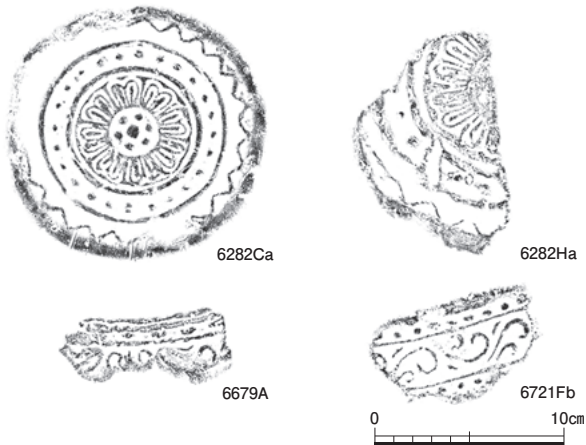
4 出土遺物

出土遺物は非常に少なく、東側溝SD10376の埋土下層から軒丸瓦6282Ca、6282Ha、軒平瓦6679A、6721Fbが出土した（図Ⅲ-43）。6282-6721の組み合わせは平城還都後に京内各所でもちいられたとされる。近在する十五坪南面の築地などにもちいられたものであろうか。

また、先述のとおり土坑SK10377の埋土から14世紀に位置づけられる土器片が出土している。



図Ⅲ-42 第511次調査遺構平面図・土層断面図 1 : 40



図Ⅲ-43 第511次調査出土軒瓦 1 : 4

5 まとめ

限られた調査面積ではあったが、左京一条二坊十五坪を東西に二分する坪内道路とその東側溝を検出した。坪内道路には一部で舗装とみられる土が遺存しており、また東側溝では一部ではあるものの護岸が遺存しているなど、遺構の遺存状態も比較的良好であった。平城京の条坊を復元する上でのひとつのデータを得ることができたといえる。

(川畑 純)